



おちほ

第47号 平成15年11月20日 発行 社会福祉法人 椎の木会 落穂寮 発行者 山下 陽一

めざせ
ナンバーワンより
オンリーワン

第36回
親子合同運動会!!



前日準備の時から雲行きが怪しく小雨も降り不安でしたが、十月十二日(日)、雨も降らず、秋空の下で第三十六回親子合同運動会を無事に行う事ができました。

入場門は女子棟担当の「プリンセスコレクション」退場門は男子棟担当で「シンデレラ城」バックデコは行事委員で今年活躍の「阪神タイガース」を使った落穂のマスコット(だと思われる)をそれぞれ製作しました。まずは入場行進。音楽に合わせて紅、白のハチマキを巻いた寮生さんは元気よく行進していました。親子競争では寮生さんが保護者の方と協力して仮装競争。お医者さんやサラリーマンなど楽しい格好で走っていました。玉入れ、つなひきも寮生さんに参加しやすい様に職員が工夫したので楽しんでくれました。招待者レースでは来賓の方や仏教婦人会の方などたくさんの方が参加してくださいました。

今回のテーマは「めざせナンバーワンよりオンリーワン」。勝ち負けよりも自分達の力を精一杯だしてもらいたい、と思つて考えました。徒走では五十人の寮生さんが自分達の力を精一杯出して全員がゴールする事ができました。ナンバーワンにならなくてもいいものとも特別なオンリーワン(SMAP)世界に「ただけの花」からみんな本当にがんばっていました。職員も寮生さん達の花を咲かせる力になりたいと思っています。

昔今ふく

忘れえぬ人々
北海道北静川土功(土地改良)組合事業にいのちをかかけた
山崎武治(老) 2

理事長 増田正司

政官財癒着の事件が日常茶飯のできごとかのように報道され、憤りをこえもうあきれて日本の将来はどうなるのだろうかとおそろしくなる。今や正義がきえ嘘がまかりとおる世の中になつてしまったのか。国民社会優先の考えをやめ、その属する集団や己の利益のために働くかようだ。

わが山口老が北海道で官職にあつたとき、その業が国民国家の繁栄のためであるかどうかという判断から企画検案し、表題の業務が政官財癒着のもとに進もうとしたとき、不正に生命を張つて阻止抵抗し、一技官の身でありながら、上司の課長・部長・地方長官に直言したが、およそ筋のとおりん理由により官を免ぜられた。後数ヶ月奉職すれば恩給年限に達するときの非常な措置だった。

事件の経過を綴つた「棟裂」(鎌田純一著、構想社刊 I ISBN 4-18-7574-106-1 3C0093 P2 300E)や「粮莠記」(ろうしゅうき) 山口武治老著、(京都北大路書房刊)に詳しくのべている。検定官としては完成を承認しなかつた工事中豪雨で崩れた土えんてい建設を、所属農民の窮状を見捨てることができず、その再建を志し、志を世に問うため「粮莠記」を出版、再版が岩波書店から発刊され、全国に声が拡がり賛同を得たが、資金寄付の申し出は一つの例外を除いてすべて辞退した。崩壊した土えん

ていの工事費負担の借財が返還できず、農民の多くが再建の望みをすて離散していった。職を奪われ収入が閉ざされた正義の士、老の進むべき道はなんだったろうか、前二書が詳しく述べてくれる。(ぜひ二書を熟読、玩味してほしい)

故郷新潟に蟄居してのち、近江学園の山の家に居を移し、ご夫婦で国の女子生徒たちの世話をすごされ、大学を卒業後学園に奉職した長女瑛子さんが、後に天津肇君と結婚された。彼が富山砺波学園長に赴任することになり、老夫妻も一緒に転居された。その地で夫人や天津夫妻・孫たちに見守られながら安らかに永眠された。永年苦勞をともしにされた幸子夫人は次女瑛子さんが嫁がれた嶋崎孝さん宅で夫妻やお孫さん夫妻・ひ孫さんたちに囲まれお元氣な毎日を送つておられたが、十月二十五日夕刻にわかに、九十七歳の天寿を全うし永眠された。

ご冥福を心からお祈り申しあげたい。公団総裁解任の聴聞とやら報道された、人間の資質が問われるような思いがする。官の不正を正そうとして職を免ぜられた老の生き様に多くの人たちが賛同し感動された。官の位をきわめた人の言動が当節にまかり通るものなのだろうか。

(平成十五年十月二十日記す)

昔今ふく

ふるさとが有る

寮　長　山　下　陽　一

四十歳となる

落穂寮を利用している五十人は、一人ひとりそれぞれの事情を背負って寮での集団生活をしています。

現在の落穂寮ではありえませんが、いまから三十数年前、石部町に移転してきた落穂寮は、一度にたくさんの子どもたちを迎え入れその生活が始まりました。現在も当時に入所したひとたち数人が生活をしています。生活を始めたころはみんな小学校入学の年齢（六歳）の子どもたちでした。

実際の寮生活において、背の低い子は布団を自分で降ろすのに高い押し入れによじ登り押し出すように落とす布団を敷くのです。がんばっている様子にいじらしさを感じつつも、小さいわが子のそんな生活が始まるのですから親御さんたちは入所施設にあずけるにあたっては大変なご決断があったのではないかと想像に余りありません。

そんな生活をはじめた子どもた

ちが現在では四十歳を超えてきています。当時はわが子との泣きの涙で子別れを決断したものを、現在では「地域福祉です、在宅福祉ですよ」と声高にいわれ、その都度に変わる役所の指導に保護者の皆さんは憤懣やる方なしといったところではないでしょうか。

ふるさとがなくなる

子どもたちが年齢を重ねることは親御さんたちも年老いることを意味します。落穂寮を利用して人たちの中にはすでに両親ともお亡くなりになっているひともありますが、これは障害のあるなしにかかわらず起きてくることです。子どもをおいて往かなければならぬいつらさほどこの世に無いことだと思えます。

先日のこと、Nちゃんのお母さんが大病でお亡くなりになりました。母親の死出の旅路の見送りに「Nちゃんお母さんバイバイ、Nち

ゃんお母さんバイバイ」と低い声でお別れをつぶやいておりましたが、どうしたことか車のエンジンがかからないアクシデントに、回向にきていた近所のお年寄りたちが、「そんなこと云うから、お母さんはよういかへんのや」とさらに涙ながら悲しみを深めておられました。彼女にとつてかけがえのないふるさとが一つなくなりました。

ふるさとへの灯

井上靖の最後の長編小説「孔子」の終章に、異郷からの長旅を終え峠から見下ろす夕暮れの村に、一つひとつ明かりをともしている家々の様子感慨深くながめている老人の姿が描写されています。少し長くなりますが、その一部を引用しますと、

…わが故里に燈火が入りつつある、という静かな、何ものにも替え難い、大きな安らぎを伴った、この思いだけは、終生、自分のものとしておきたいものであります。いかなる政治でも、権力でも、人間から、このぎりぎりの望みを奪り上げる権利はないと思えます。

…いかに世が乱れに乱れようと、人間から、故里というものだけは、奪りあげてはならない。若し奪り

あげてしまつたら、当然、替わりのものを返さなければならぬ。それが政治というものである。」

この小説の背景になっているのは、約二五〇〇年前の中国大陸全土の戦乱のさなか、戦いに敗れ祖国を失った流浪の民の終の住処への感慨をドラマティックに描いている部分なのですが、多くの読者の感動を誘う場面だと思います。

故里とは、すべてのものを受け入れて、飲み込んでくれるところだと思えます。たとえば、俗に「盗人にも三分の理あり」といいますが、この「三分の理」を受け入れてくれるところ、それが故里。障害のために一般社会には受け入れられない行動があったとしても、日々の緊張や不安いっばいの生活から故里で過ごす安らぎをもたらす場は欠かせないのです。

Nちゃんにとつて、確か大きな安らぎのある故里は、一つ無くなたかもしれません。しかし彼女を取り巻く人たちの温かく優しい手が生まれ始めているように思っています。

それは、彼女にとつて新しい故里ともいえるものが一つできつつあることをホツとした思いと同時にそれを見守ってあげたいものだと思っています。二〇〇三・一〇・二〇

遊園地 (崇史さん)

今回は崇史さんと職員の人2人きりで、九月一日・二日と一泊で東条湖おちや王国に行かせてもらいました。人数は少なかつた旅行でのんびりほとんどなかつた旅行でのんびりまじと遊園地・プールを堪能できました。

車椅子での移動はスムーズな時もあれば、狭いトイレや玄関、アトラクションの乗り降り等々、困難な場面も多々ありました(涙)。しかもホテルの従業員の方々へ助けてもらったり、



遊園地の東条湖

～泳ぐ男～

道行く人がドアを開けてくれたりと、感謝感謝の途中でした。本人としては、楽しみにしていたジェットコースターに二度も乗ったり、流れるプールのたたく気に入った様子でニコニコしつぱなしの二日間でした。



食べる in 浜松

闘う男たち

「食べる」班は全ての食事胃一杯に食べ放題!本当にお腹が忙しくて、写真を撮るの暇も忘れてました。他にも豊田(TOYOTA)の博物館でゲームをしたり、浜松航空自衛隊広報館で航空機にのりたり、航空服を着たりと楽しい旅行でした。



10月15日・16日と、今大人気のUSJに行ってきました。旅行前日に大雨が降りどうなるやらと心配しましたが、当日は晴天となり、雨にたせられることもなく二日間を過ごしました。

USJに到着してみると、ものすごい人が大変でした。USJには様々なキャラクターがいて一緒に写真を撮りまくってもびびったり泣いたりしてしまう寮生さんいました。USJ全体がかりウラドの雰囲気、まるで海外にいるみたいとびっくりしていら寮生さん達でした。

リフレッシュ旅行

食べて 遊んで 泳いで

砂丘班

砂丘班は、8月6日、7日と2日間かけて鳥取砂丘と森山高原と行ってきました。1日目は鳥取砂丘がメインだったので、砂丘に行くところまでひたすらつくくタイムラップな



砂丘 in 鳥取

～直を呼ぶ男たち～



砂丘に驚きつつ、丘の向こう側の海を見指し急斜面を下ったつもりでした。大層の砂のすべり台を下る事など減多となりの珍しいのと素足で感じる感覚が気持ちいいので非常に楽しめました。2日目はあいにくの雨だったのと台風が接近というところで森山高原ではゆっくりと散策ができます。早めに切り上げての帰寮でしたが、旅館もほぼ貸し切り状態できかねなく羽をのぼすことができました。

電車班



リフレッシュ旅行第3班は岡山の笠羽山ハイランドとおちや王国へ行ってきました。メンバーは男子棟の八島くん、坂田くん、木元くんの三名。今回は寮生さんからの「新幹線に乗りたい」のリクエストにより、石部駅から京都駅まで、京都、岡山間は新幹線、岡山からはレタカで移動という旅行になりました。乗っけてもいい寮生さんには移動代も楽し旅です。笠羽山ハイ



遊園地 in 岡山
踊り狂う男たち

ランドではジェットコースターやメリーゴーラウンド、コヒーリングカップと、時々乗車拒否する寮生さんもいましたが、楽しく遊ばしました。ゴラジール、オニバルという催しもありブラジルの方々と一緒にサンバを見ようと思えば踊りたおしました。食事は瀬戸内の海の幸を満喫。にぎやかに充実した旅になりました。

▲時代はITだ。

▼夏の思ひ出



早くお肉を
食べさせてー

去る九月九日に女子棟は飯盒炊さんへと行って来ました。昨年とは場所を変え、今まで行った事のない竜王町の妹背の里にてバーベキューをすることにになりました。妹背の里には魚やカメがいる大きな池やアスレチック、また天然の河原もすぐ近くにあり、肉や野菜が焼けるまでの時間を有意義に過ごすことができました。

河原では、水着ではないので裸足になって服が濡れないようにと慎重に遊ぶことになってしまったのですが、何せ足元は石がゴロゴロとしているので、すってんコロリんとすべって尻もちをついてしまう寮生さんもあり、「何で水着を持って来なかったのだろう！」と悔やむ一面もありました。

▼お肉まだ？おなかが減って力が出ない



しかし、日差しも強く水辺にいと一時だけですが汗も引き、気持ちが良いさそうでした。お腹がすぎ過ぎての食事だったので食べる、食べる。すさまじい食欲なので焼いている職員は驚きつつも汗をかきながら必死で焼いている程でした。

あり、日頃動かない寮生さんも興味が湧いた様でここぞとばかりに動いており笑顔が沢山見られました。毎年例年の行事ですが、行き先が違うことで寮生さんのまた違った表情に出会うことができました。に思います。

ぼくドラえもん

三時といえば、おやつの時。
落穂寮でも三時にはおやつを食べていますが、月に一回、食堂にておやつづくりに取り組んでいます。今回は九月のおやつづくりを紹介したいと思います。九月は「どら焼き」を作りました。どら焼きの生地を作る人、焼く人とそれぞれできる寮生さんは参加してもらいます。みんな張り



切って手伝ってくれます。ちなみにあんこを生地にはさむのは寮生さん全員にしてもらいました。そしていよいよ完成！いただきますをして食べました。みんなとてもうれしそうに食べていました。もちろん後片付けもしつかり取り組んでいます。毎月一回のおやつづくりは寮生さんが楽しみにしている取り組みの一つです。職員も色々メニューを考えてなるべくみんなで作れる楽しいおやつを考えています。

日帰りのキャンプ

これまで落穂寮では七月の終わりに二泊三日でびわ湖へ泳ぎに行く湖畔学舎という行事を行ってきました。しかし、おとしまで利用させてもらっていた今津荘はなくなってしまう、昨年初めて利用させてもらったホテル西びわこは閉鎖。約五十名の大所帯を貸切りで泊めてくれるような場所はびわ湖周辺からなくなりました。

一時は中止も考えたのですが、夏に泳ぎに行くことを楽しみにしている寮生さんも多く、今年からは寮生さんを三つの班に分けて日帰りキャンプをすることになりました。また水が苦手、年齢的に泳ぐのはちょっと...という寮生さんもおられるので、山でのんびりキャンプをする班も作りました。これはその報告です。



元気組のみなさん

明暗分かれた湖班

湖班は、元気組さん、のんびり組さん、の二つに分かれて七月二十三日と二十五日の二日に分けてびわ湖へ泳ぎに行ってきました。場所は近江八幡の国民休暇村。昼食を休暇村で食べて昼から泳ぐといたコースです。昼食を食べると職員が前もってテントを用意した砂浜へ下りて、さあ泳ぐぞ!となったのですが...。二十三日の元気組さんは、今年の夏にしてはまあまあ天候で、元気に水の中ではしゃぎ回っていました。職員に水をかけたり、かけられたり。水中に潜ったり、見事な(?)泳ぎを披露してくれる寮生さんもいて、寮のプールで見せる笑顔とはまた一味違った良い笑顔をたくさん見せてくれました。さて、一方の二十五日に出かけたのんびり

り組さん。この日は今年の冷夏を象徴するような天気。空は雨こそ降らないものの、どんよりの曇り、湖から吹いてくる風は「おい、七月かよ?」と言いたくなるようなつめたい風。水の中は案の定、ふるえ上がるような冷たさ。寮生も職員も一度水に入っただけでギブアップ。仕方ないので、おやつ用に用意したすいかで、すいか割り大会を開催しました。あらぬ方向へ棒を振り下ろす寮生さん、すいかに命中するも力が足りずすいかに弾かれる寮生さん、タオルの下からこっそりのぞき見しようとする寮生さんと、一同大いに盛り上がりました。のんびり組さん、はちよつと残念でしたが、楽しい、夏の思い出になったのではと思います。



のんびり組のみなさん、さむかった～

ステーキを付けました。これがまたよい肉で、ひとり三切れづつでしたが、とてもおいしくみんなバクバクと食べていました。食事後は自由行動。水あそびのできる場所でしたが、水に実際に入ったのは六人程度。やはり水が苦手な人が集まった山班といったところでしようか。水に入らなかつた人ものんびりと自分の時間を楽しんでいました。

山班は七月二十三日に甲賀町の高間みずべ公園という所へ日帰りキャンプに行ってきました。山中の砂防ダムに作られた公園で、広場もあり水遊びもできるのんびりとした所でした。公園に到着すると、すぐに昼食の準備。メニューはキャンプにつきもののカレー。ただ、いつものカレーでは物足りないという事ではないかとステーキを付けました。これがまたよい肉で、ひとり三切れづつでしたが、とてもおいしくみんなバクバクと食べていました。食事後は自由行動。水あそびのできる場所でしたが、水に実際に入ったのは六人程度。やはり水が苦手な人が集まった山班といったところでしようか。水に入らなかつた人ものんびりと自分の時間を楽しんでいました。



のんびりカレーの山班

石部中交流会 Part I

毎年恒例となりました。石部中学校年生との交流会が、今年も六月十八日に行なわれました。相憎の天気です外での活動は、残念ながら実施することができませんでしたが、体育館での機能訓練(歩行)やお風呂掃除に取り組んで頂きました。やはり最初はどの生徒さんも消極的で、自らかわつて行くというのは難しかったようですが、年に二回行なわれている事もあって、回目は慣れる為のもの。言わば本番に向けての予行演習とつたところでしょうか。その意味では充分にその目的は果たされたのではないかと思えます。二回目はこの「おちほ」が発行される頃には終わっているのですが、とても楽しみにしています。一回目の感想をほんの少しですが紹介させて頂きます。次号を楽しみにしながら御読下さい。

西田 圭佑

僕は、六月十八日水曜日に落穂寮にふれあい活動をしに行ってきました。初めに服部君のあいさつで始まってその後、すぐに、ぼく達は、「世界に二つだけの花」を歌いました。声は小さかったけど一応

ちゃんと歌えました。そして、今日の目標は障害者の人とふれあう事です。

次に、ぼく達五班は、お風呂そうじなので浴室に行きました。ぼくたちは全員デューキブラシをしました。浴室は男子、女子二つあるので男子の浴室からしました。はじめはみんなおとなしくてあんまり気がついていなかったけど、ちょうど時間がたつとみんなだんだん回りの様子になってきて完へきにお風呂そうじに参加できたと思えました。そして二つと浴室が終わったところで僕が思った事は、落穂寮の人とふれあえてなかつたなと思えました。だけど僕は、お風呂そうじは僕たちより落穂寮の方が、がんばつていたんじゃないかなと思えました。僕はそこで障害をもった人でもこういう事も簡単にできる人だなと思えました。

最後に反省の時間に落穂寮の人が話していた事を聞いて障害をもった人は、障害をもった人しかできない事もあるんだなと思えました。

僕は、この交流を終えて思った事は、やっぱり障害をもっている人でもやろうと思えばできる事は多いという事です。残念だった事は、やっぱりあんまりふれあえなかつたという事です。だから秋に行く時は、もっとふれあいたいです。僕はこの体験をこれからの生活に生かしていきたいです。

尾崎 勇貴

ぼくは、初めて、落穂寮に行きました。入ったとたん、落穂寮の人に会ったとき、「どんな人だろう。何をしてくるのかなあ」と思いながらんちようしていました。何もしてきなかつたときは、「はあ(ため息)と思いがら対面式にきました。食堂に行つて、障害者を待っていました。でも、入ってきたとたん、叫びだしたり、暴れたたりしたときは、とてもびっくりして、こわい気持ちになりました。



た。なんとか、こらえて、対面式が、始まりました。ぼく達は歌を唱うことになつたので、唱うだけ、みんな声小さかったので、落穂寮の人が盛り上がりたくなれなかつたけど、手びょうしやノリに合せて、首をふつてくれたときは、うれしい気持ちになりました。終わった後、拍手をしてもらえました。「ああ、いい人達だなあ」と思いました。体育館の回りを手をちなぎながら歩く活動が来たときは、ドキドキしながら、少し不安な気持ちがありました。障害者の人達がどのように手をつないでくるか、わからなかつたからです。しかし、案外おつに手をつないできたので、少し安心も、もてました。でも、僕に対して、いやがる人が、二人もいたのが少しショックでした。三人目の人と一緒に体育館でお魚天国などの曲を鳴らしながら歩きました。

さん歩が終わると障害者の人や、しせつの人、アメやお茶をくれました。そのときはうれしい気持ちになりました。そして、昼食を食べて、学校へ帰るときがきました。そのときは、「初めは不安がいっぱいだったけど、こうして交流をしてみると、不

安も無くなるもんだなあ。」と心の中で少し思いました。次は、一日あるけど、不安を持たないようになりたいと思っています。なるべく笑顔になれるように心掛けて、障害者の人をむかえたいと思います。

泉

▽前号で、最も大切なのは支援する人の価値観であり、人間性だと書きました。本来、知的ハンディを持たない人は、成長過程で様々な人と接し多様な価値観に触れ、その中から自らの価値観を培っていくのですが、ハンディを持つ彼らにはそれが難しく、提供されたものの中からの選択しかできません。支援者は私だけではなく、職員全員であり、保護者、県、国など多くの人が支援者という立場なのです。そこで私達職員は、何を基準として支援するべきなのでしょう。家族の彼らそれが受け入れられるか。家族の彼らそれが全て受け入れられるものか。と言えないのではないのでしょうか。一人の人間として接する場合、客観的に見る事も大切です。そして、私達ももっと家族の想いを感じなければいけません。二番目に大切なのは、客観的に見られる心をもつことです。

木 言

与えることはするが求めはしない。気付く者は感謝してくれている。その気持ちに、また応える。求めることは歪を生む。与えることは共生につながる。